

看取り介護者の喪失感と家族会参加による克服のプロセス研究

～Mさんのライフ・ストーリーを通して～

○日本福祉大学地域ケア研究推進センター 金 圓景 (7133)

平野 隆之 (日本福祉大学・814)

〔キーワード〕 看取り介護者、喪失感、家族会

1. 研究目的

本研究は、看取り介護者（以下、OB）が経験する喪失体験に着目し、家族会活動への参加を通して、看取りによる喪失感をどのように克服したのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とする。

これまでに筆者は、介護中の家族介護者への支援方法としてセルフヘルプグループやサポートグループ、あるいは当事者組織としての家族会が有効であることを検討してきた。その結果、OBが家族会に参加し続けており、家族会活動の拡がりから開発された新たな活動プログラムは、OBの居場所となっていることが確認できた（金 2010、2012）。このことからOBは、看取り後、自分の居場所を探していることが示唆されたが、それ以上のことについては、十分に検討することができなかった。

そこで、本研究では、これまでの研究成果を踏まえた上で、OBが経験する看取り後の喪失感と、その克服のプロセスを検討し、OBへの支援の在り方を提示することを試みる。

2. 研究の視点および方法

本研究は、OBの喪失体験と、その克服のプロセスを明らかにするために、ライフ・ストーリー法を用いた。その際には、グリーフプロセスと、Aneshenselら（1995）の介護のキャリアプロセスにおける介入の方策を参考にした。従来の研究では、死別、特に配偶者との死別に関するものは複数みられるものの、看取り後のOBに焦点を当てた研究は十分に行われて来なかった。そのために、本研究では幅広く文献レビューを実施した。

調査は、家族会に参加していた看取り後のMさんを対象に、2009年11月から2010年11月までにかけて行い、参与観察とインタビューを実施した。インタビューは、全部で約4時間に及んだ。調査の際には、家族会活動への参加を通して、看取りによる喪失感をどのように克服したのか、自由に語ってもらった。分析の際には、逐語録を作成し、ナラティブ分析法のなかのホリスティック・コンテンツ分析法とカテゴリカル・コンテンツ分析法を参考にした（金子 2009：61-62）。

3. 倫理的配慮

調査対象者に対しては、書面と口頭にて研究の趣旨を十分説明し、同意を得た。また、インタビュー内容を IC レコーダーにて録音することの了解を得た。調査及び分析の際には、調査対象者の人権や安全を最優先するよう細心の注意を払った。

4. 研究結果

本研究では、家族会に参加していた M さんが看取り後、どのように喪失感を克服したのか、語られたライフ・ストーリーの展開過程を整理した後、ライフ・ストーリーの構造化を試みた。その際には、Aneshensel ら (1995) の介護のキャリアプロセスを参考に、「役割獲得」、「役割実践」、「役割離脱」の 3 つの時期に分け、それぞれの時期におけるイベントを整理した。例えば、「役割獲得」として介護のスタート当初のイベントとして帰郷、「役割実践」として在宅での 3 人の介護と家族会への参加、「役割離脱」として父の死などを整理した。また、看取り後の M さんが、どのように喪失感を克服したのかについて M さんの語りからカテゴリー化を試みた。その結果、「家族会メンバーからの支援」、「家族会ワーカーからの支援」、「当事者性の拡がり」、「誰もがつどえる場づくり」が抽出された。

5. 考察

第一に、家族会は、介護者役割が終わった、OB が社会に再適応するための媒介としての場となっていることが確認できた。従来の家族会研究では、現役介護者への情緒的支援や情報交換などの機能があることについて検討されてきた (金田 2005 ; 大森ら 2006 ; 櫻井 2006 ; 金 2010)。しかし、今日、ほとんどの家族会に OB が増えてきていることは知られている一方で、OB の家族会参加については十分に検討されて来なかった。本研究は、家族会の新たな機能として OB の社会への再適応の媒介としての場となっていることが確認できた意義が大きい。

第二に、看取り後、M さんは喪失感を感じながらも、人生の変化に向き合い、誰もがつどえる場を作るなど、新しいことを始めていることが確認できた。このことは、Strobe ら (2001) によるグリーフプロセスの二重プロセスモデル (Dual Process Model) に適する。M さんの事例は、グリーフプロセスにおいて「喪失」と「再構築」の 2 つを行き来しており、このモデルに該当する (金子 2009)。

第三に、看取り後の M さんは、ソーシャルワーカーの支援により、新たな社会資源を開発していることが確認できた。このことから、Aneshensel ら (1995) が指摘している介護者としての役割離脱期の社会への再適応にソーシャルワーカーの支援が有効であることが示唆されたと言える。本研究は、単一事例検討に留まったため今後、より多くの事例を検討することが課題として残された。